

546 軟部腫瘍におけるGaシンチグラフィの意義
松本誠一, 川口智義, 真鍋 淳(癌研病院整形外科)
小山田日吉丸, 山田康彦(癌研病院アイソトープ部)

自験例をもとに, Gaシンチグラフィの軟部腫瘍診断における意義について検討した。症例は, 当科にて手術を施行し組織診のついた軟部腫瘍64例である。主な症例は, MFH 14例, 脂肪肉腫11例, などであった。その結果, ①Gaシンチでの良性悪性の診断は困難であった。②小児横紋筋肉腫など円形細胞肉腫では, 陽性率が高く, リンパ節転移の検出に有用であった。以上より, 本検査は, 良悪性判定の補助的手段として用いるべきではなく, 円形細胞肉腫などの様に原発巣が強い集積を認める症例において, 転移巣の検出および術後経過観察に用いるべきである。

547 小児の ^{67}Ga シンチグラフィにおける胸腺抽出の検討

田之上供明, 岩下慎二, 中別府良昭, 中條政敬, 篠原慎治(龐大 放)

昭和58年から63年迄の6年間に施行された0才から, 15才迄の ^{67}Ga シンチグラフィの胸腺抽出について, 胸腺抽出率, 年齢分布, 疾患との関係, 治療との関係, 予後との関係について報告したい。胸腺抽出率は症例数で15.8%で, 胸腺が抽出されるのは0才から4才迄に多く, 全陽性スキャンの79%を占めた。胸腺陽性例の治療との関係では, 化学療法中で陽性率は30%を示し, 化学療法後3ヵ月以内で80%と化学療法後陽性化する傾向がみられた。さらに胸腺抽出例の予後について, 疾患別に長期的にfollowし, 胸腺が抽出されない症例と比較検討し報告したい。

548 神経芽細胞腫の骨シンチ、 ^{67}Ga シンチとNSEの比較検討

諸澄邦彦, 橋本正美, 高橋 晃, 松本 慎, 川崎雄一, 黒川晴幸, 荒井 孝, 山本英明, 池井勝美, 橋本 宏,
(埼玉小児医療センター放部), 相原敏則(同 放科), 山本圭子(同 腫科)

神経芽細胞腫は, 小児の悪性固形腫瘍の中で頻度が高く, 予後の悪い腫瘍である。画像診断として, 単純X-Pの他, 超音波, CT, IVP, 血管造影等の報告がある。1983年5月より1988年12月までにVMAマスキングで発見された症例を対象に, 骨シンチ, ^{67}Ga シンチの陽性率と, Neuron Specific Enolase(NSE)の値を比較検討したので報告する。

^{67}Ga シンチに比較し, 骨シンチの陽性率は高く, 診断, 再発の経過観察の指標になると考えられた。

549 Adult T-cell Lymphoma Leukemia (ATLL)の骨・ガリウムシンチグラフィ

星 博昭, 陣之内正史, 長町茂樹, 大西 隆, 中村邦子, 渡辺克司
(宮崎医科大学放射線科)

Adult T-cell Lymphoma Leukemia (ATLL)に対して骨およびガリウムシンチグラフィを行い臨床的検討を行った。対象とした症例は宮崎医科大学を受診しATLLと診断された30例である。

用いた装置は, MaxiCamera 400T (GE), LFOV (Searle)およびオメガ500 (Technicare)である。

ガリウムシンチではリンパ節および肝・骨の臓器浸潤部位に異常集積がみられ, また, 骨浸潤部位の検索に骨シンチは有用であった。ガリウムシンチで異常集積がみられたものは, 血清LDH, Ca, 末梢白血球数の高い傾向がみられた。

550 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -PMTによるHepatoma転移巣の検索

一撮像時間の検討及び骨, ^{67}Ga スキャンとの比較—
伊藤清信, 外山 宏, 竹内 昭, 富田和美, 前田寿登,
高橋正樹, 古賀佑彦(保健衛生大・放) 鈴木謙三, 鎌田憲子(都立駒込病院・放)

hepatoma転移巣検索のための $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -PMT全身スキャンの撮像時間の検討及び骨スキャン, ^{67}Ga スキャンとの比較検討を行なった。 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -PMT 5mCi静注直後, 経時的に全身スキャンを撮像した。静注後早期は肺, 肝臓への集積, 以後上部, 下部消化管, 胆嚢への集積がbackgroundとして問題になると思われた。腫瘍への集積比, 腫瘍対非腫瘍の比から20-30分が撮像時間に適当と思われた。骨, ^{67}Ga スキャンとの比較では, $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -PMTは検出率に優れており, hepatoma転移巣検索に有用であると思われた。 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -PMTに関してはbackgroundとの重なりにより検出されないことがある。

551 肝細胞癌骨転移の核医学診断

中西佳子, 河 相吉, 永田憲司, 黒川弘晶, 播磨敬三,
田中敬正(関西医大・放)

当院にて診療した原発性肝細胞癌286例中, 骨転移を21例に認めた。そのうち, 核医学検査を施行した17例55病巣を対象に, 骨, Ga, PMT シンチグラフィの結果を検討した。骨シンチは17例全例に施行され, 陽性像29病巣, 欠損像2病巣, 混合像9病巣で, 計40病巣(73%)に異常を認めた。Gaシンチで陽性の集積を示した病巣は, すべて骨シンチにおいても異常所見を示した。PMTシンチを施行した6例32病巣については, 29病巣(91%)において異常集積を認め, そのうち2例は骨シンチにて異常を認めなかった。骨シンチグラフィにおける転移性骨腫瘍の検出率はすぐれているが, 肝細胞癌の骨転移検索に関して, PMTシンチは陽性率も高く, 特異的な診断が可能であり, 意義があると考えられた。